

生涯学習としての「豊の国IT塾」

渡辺 律子

豊かな生涯社会の形成に向けて、生涯学習のニーズは高度化、多様化してきた。一方、近年の著しい情報通信技術の進展により、インターネット等を活用する能力を身につける必要性が強く求められている。国は、平成 13 年度に「e-Japan 戦略」を打ち出し、全ての国民の情報リテラシーの向上を図るため、学習機会（IT 基礎技能講習）を提供する事業を行った。本稿では、大分県で行われた IT 講習「豊の国 IT 塾」実施の様子と今後の課題を述べる。

1. 豊の国 IT 塾

平成 13 年度、国の事業として、全国各地で国民約 550 万人を対象に IT 講習会が開催された。大分県では、20 歳以上の県民 68,000 人を対象に、「豊の国 IT 塾」の名で講習会が企画され、小・中・高等学校、庁舎、公民館、図書館、博物館、その他地方公共団体の施設、大学・短期大学、民間施設等で実施された。

大分県立生涯教育センターでは、2,000 人に対し 100 講習のスケジュールで IT 塾を実施した。図 1 に申込者数の推移を示す。県下で先駆けて開催した当初は、申し込みが殺到したが、他の会場でも講習が始まった 4 月、5 月ごろから申し込み数が減少してきた。開催当初は 1 人 1 回の受講が原則であったが、再受講が可能になったことで、7 月から申し込み数が増加した。また、1 度受講した後で次のステップの講習内容を求める声が多かったため、12 月から応用コースを実施した。11 月からの申し込み数の増加は、「応用コース」の応募を始めたためである。

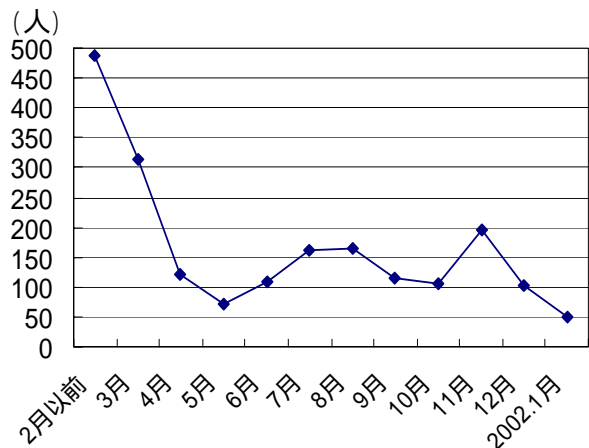


図 1 申し込み数の推移

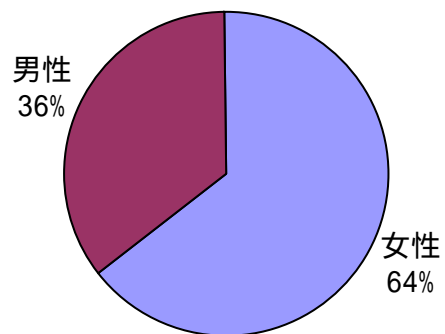


図 2 受講者の性別

2. 受講者

受講者の男女比は、女性が 64% と多い（図 2 参照）。また、年齢層は 20 歳の大学生から、91 歳までと非常に幅広かったが、60 歳代が最も多く（35%）、続いて 50 歳代（24%）、70 歳代（18%）となり、50 歳以

上が全体の 7~8 割を占めた（図 3 参照）。仕事を退職をして自由な時間を利用して来る人が中心であり、夫婦の参加も目立った。講

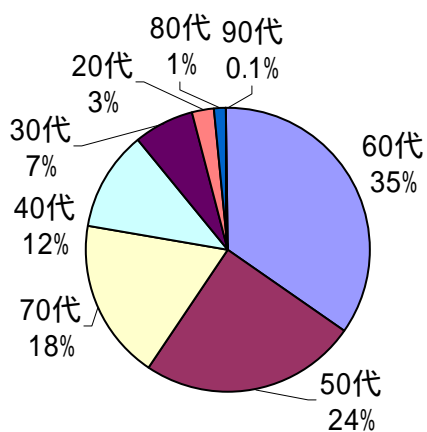


図3 年齢



図4 講習会の様子

習時間は1回3時間（全4回12時間）とし、平日は週2回、土・日は、週1回、夜間は1回2時間を週1回として講習を設けた。夜間の回数が少ないことから、勤労者の参加は難しかった。受講者のパソコン経験は「触ったことが無い」「触ったことがあるが使えない」が約7~8割であった。受講のきっかけは「どんなものかちょっとやってみたかった」「みんなが行くから、友達に誘われたから」が多く、その目的は「情報化社会について行きたい」「仕事で必要にせまられて」「孫とメール交換したい」が主に聞かれた。また、パソコン経験者は「インターネットを中心の講習を希望する」が多く、受講者の経験度や希望は様々であった。

3. よりよい講習会のための準備

パソコン初心者にとって、分かりやすく、丁寧な講習会を実施するためには、次の3点がすべて揃う必要がある。

コンピュータ環境が整っているかどうか。パソコン1人1台の確保、高速のネットワーク環境、プロジェクタやスクリーン、マイクなどの機器設備、冷暖房設備などが重要な要因になる。

講習内容を対象受講者に応じたものに工夫しているかどうか。テキスト以外の補足資料の作成、ローマ字が苦手な人にはかな入力、ダブルクリックが苦手な人には右クリックの利用、画面の文字の大きさなどの変更が必要である。

講師補助を含めた講師陣が共通のスキルをもち、受講者に合わせた対応ができるか。

こうした環境で定員20名に対し、常に3~5名の講師陣が、講師画面をスクリーンに投影した一斉指導ときめこまやかな個別指導（Team Teaching）を行った。

4. 講師の目標

今年度、国が定めたモデル的なIT塾は、「パソコンの基本操作」「文字入力・文書作成の基本」「情報検索の体験」「電子メールの体験」を基盤とした講習内容であった。しかし、「まったくのパソコン初心者」や「年齢の高い人」が受講者の中心の場合、12時間の講習の中でこの講習内容を理解させ、十分な練習時間を確保することは困難であった。講師陣は、「受講者のパソコンに対する恐怖心をなくす」「パソコンに慣れる」「パソコン・インターネットでどんなことができるのかを体験する」ことを講習会の目標とし、講習を進めた。

5. 講習会の様子

受講者は大変意欲的に受講していた。1回目は緊張する人が特に多く、手や肩に力が入ってマウスが思うように動かない人も多い。高齢のため手・指を動かす操作が難しい人に対しては、補助講師が手をそえて一緒に操作を行った。マウスやキーボードの基本操作は、

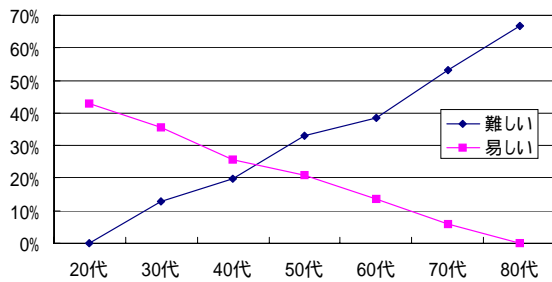


図5 パソコンの基本操作について (講習終了時)

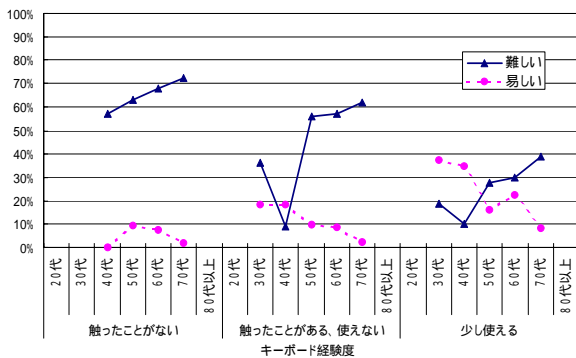


図6 キーボードの経験と難易度 (講習終了時)

1回目はほとんどできない人も、4回目には使いこなすまではいかなくても少し慣れてパソコンへの恐怖心も少なくなった。また、回を増すごとに、受講者間の交流も増え、次第に教室の雰囲気や和やかになった。見たいホームページが見つかったり、電子メールで初めてメールが届いた時などは、あちこちで喜びの声、驚きの声、笑い声が聞こえ、楽しそうに受講していた。

6. 受講の感想

今回、当センターで行ったIT塾に対して、多くの受講者から「大変丁寧な指導で分かりやすかった」「とても楽しかった」「少しでもできるようになって嬉しい」の評価・感想があった。新たな学びが、人間をいきいきさせることを実感し、生涯学習の大切さを再認識した。パソコンへの不安が解消され、自分でも使えるという期待と満足感を得るIT塾は、情報格差をなくすきっかけになったと思う。

表1 インターフェースについて

マウス
<ul style="list-style-type: none"> マウスポインタが目的の場所に動かない。 ボタンの押し加減が分からない。 左右ボタンの使い分けが難しい。 ドラッグの操作が難しい。

キーボード (文字の入力)
<ul style="list-style-type: none"> キーボード配列が難しい。 キーの文字が小さい、色が薄い。 キーを長く押ししてしまう。 ローマ字つづりが分からない。

ディスプレイ (表示)
<ul style="list-style-type: none"> 文字の大きさが小さい。 メニューなどの文字が見づらい。 (特に電子メールやホームページのアドレス入力の際)。

一方、12時間ではパソコンを使いこなすまでにはほど遠く、「今後使いこなせるか不安」「もっと練習する時間がほしい」「次のコースを考えてほしい、講習会の場を増やしてほしい」「高齢者用にパソコンが使いやすくなってほしい」の要望も多く見られる。

講習終了後に、主にパソコンの使い勝手についてたずねたアンケート結果の一部を示す。「パソコンの基本操作について」は、事前のパソコン経験に関わらず、高齢になるにつれて、「難しい」が多い(図5参照)。マウスの操作に関しても、事前に「少し使ったことがある」という人でも、「難しい」と応えた人が、高齢になるにつれて多い。それに対してキーボードの操作については、年齢に関わらず、初めてキーボードに触れる人は、「難しい」が多い(図6参照)。また、パソコンのインターフェースについて多く聞かれた意見、感想を表1に示す。このように、受講後の感想は様々であるが、別の問について「知人にIT塾を紹介したい」「さらに詳しい講習を受けたい」という回答が圧倒的に多く、

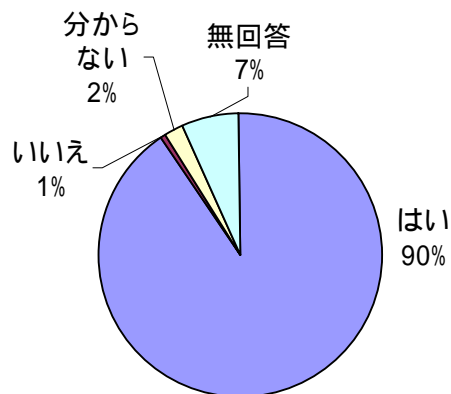


図7 IT塾を知人に紹介しますか？

今回のIT塾をきっかけにさらに深く学びたいという意欲が強く感じられた(図7, 8参照)。

7. 応用編IT講習会

IT塾受講後のフォローが大事だと考える。次の点に注意し講習会を開催する必要がある。

パソコンを難しく感じる最大の要因は、年齢に関わらず「キーボード」にあり、「キーボードに馴染むことが一番」を充分認識する必要がある。Windowsソフトに共通する操作を一つのソフトで習熟する力が、他のソフトへの活用につながる。「インターネットの利用」では、生活の中の具体例を用いる。受講者の年齢層や職種、ニーズに合った内容を取り扱う。情報倫理(情報モラル)についての講義を必要とする。各施設の役割や特徴を生かした内容、関連性の強い内容を扱うことが大切と考える。仕事に生かしたいと考えている人に対して、資格試験の取得方法についての情報提供を行う。公共施設、民間施設を利用したIT関連の講習会についての情報を県民に分かりやすいよう示す。知識や技術を習得した後、それを社会にフィードバックできる場についての情報提供を行う。

8. 豊の国IT塾の効果

パソコンは、まだまだ、人間にとってやさ

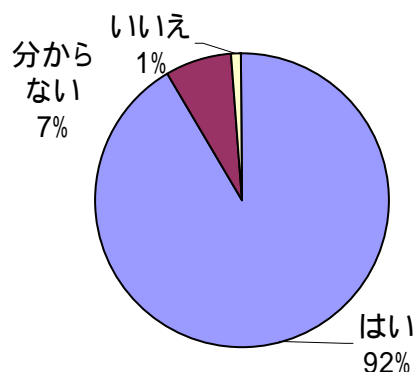


図8 さらに詳しい講習を受けたいですか？

しくはない。高齢者や情報弱者にとって使いやすいパソコンの開発をメーカーに期待する。また、IT塾のような学習の場の継続的な提供が、是非、必要である。全ての人々がIT技術を駆使できるようになることは困難だが、IT技術を十分に使えなくても、IT技術で何ができるかを理解し、情報化社会に対応して生きることが大事だと考える。また、IT塾を介して、世代を越えた人と人との交流が行われた。こうした場の提供が、核家族化などで、疎遠になった地域社会に心の潤いを与えたことも、IT塾の当初の目的にはなかった副産物であった。

今年度は、国が企画した講習であったが、今後はそれぞれの地域で、住民の要望に応える取り組みを継続して行う必要があり、それによって施設の活性化も図れると考える。

謝辞

石井圭一郎さんをはじめとする生涯教育センターの皆様、IT塾スタッフの皆様にご協力いただき、誠にありがとうございます。調査にご協力くださいましたIT塾受講者の皆様にご挨拶いたします。

参考文献

- [1] 竹内 宏:「これがIT革命だ!」学生社(2000)。
- [2] 豊の国ハイパーネットワーク基本構想最終報告書、大分県(平成13年3月)。